

# F-ROAD SUPER-BEETLE PROJECT

エフロード・スーパービートル製作日記

## 目指せ草レースの鬼!

いよいよ色塗り。メンバーみんなで色々悩んだ末、選んだボディカラーはドピンクに決定。

エフロードの宣伝車も兼ねるビートルだけに、地味で目立たない色は絶対ダメ。

でも、ピンクって…。そりや目立ちますが…。このクルマで悪さはできません。

文●半谷範一 撮影●森口信之

取材協力●ベストインポートサービス TEL:048-282-6119 <http://www.vw-bis.co.jp>

スピードジャパン TEL:03-3555-8865 <http://www.speedjapan.co.jp/>

日栄自動車商会 TEL:024-534-9680 <http://auto.jocar.jp/nichiei/>



## ピンクピンク、ドピーンク!!



カメラマン森口と日栄・中村。  
ビートルネタなので黙って写  
真だけ撮つて写つことが出来  
ない森口カメなのです。

指揮官  
日栄・鈴木

日栄自動車  
助っ人3人組

SJ小澤 ライター半谷

オーナー古Q

実行責任者  
日栄・中村

艶消しペイントはメンテが大変?  
大変なことは嫌いなんでピンクに決定!

先月号ではボディの塗装前の段階までを報告させていただいたが、実はあの段階でまだ全然色が決まっていなかつた。古Q編集長、どうすんの? 以前から度々書いている通り、このプロジェクトがスタートした段階で考えていたのは艶消しのペイント。最近のスーパーカーとかでは結構流行つてみたいなんで、スーパーカー雑誌のエフロードとしては良いかもね。

ところが、実際に板金塗装を引き受けたくださった日栄自動車の鈴木専務も、実際に作業を担当する中村さんも、あまり乗り気ではない様子。艶消しの塗装っていうのは、綺麗な状態に保つのが結構大変だというのだ。

ガレージ保管でちゃんとお金をかけてメンテできる人なら話は別だが、恐らく野ざらし駐車だろうし、あちこちのイベントの取材でボディのケアに(お金はもちろん)十分な時間をかけられそうにないクルマには、どう考えても適さない。それに、エフロードの看板としてスポンサーのステッカーとかも色々貼つちゃうだろうから、剥がした後の状態も心配だ。

で、古Q編集長が決めた色がコレ。そう、ドピンクだ。でもドピンク色と決めた後も、どんなピンク色にするのかで色々悩むことになった。同じピンク色でも、色見本を見ると無茶苦茶たくさんの中種類があるからだ。

古Q編集長の希望は「くすみのない透明感のあるピンク」だったのだが、色というものは光の加減等によって全然見え方が違ってくるから厄介。正直、色見本なんかじゃ全然分からぬ。結局、鈴木専務や中村さんのアドバイスもあって、こんな感じのピンクに決まったのだが…。



複雑な形状なので、下地の処理も中々大変そう。面倒臭いことをお願いして後免なさい。このスパイラー、ご覧のようにバンパー上にマークがある年式にしようするタイプ。FSBはフェンダー上にマークがある年式なので、ここには何も装着していないかったが、やはり飾りでも何か付けた方が良さそうだ。



その間、中村さんは塗料が収納してある部屋にこもって? 今、板金や塗装に関しては適性というのがあるので、誰にでも同じように出来るわけではないとい。塗装関係の就職希望者の面接のときには、窓を拭かせてみると大体分かるとのこと。



まずは塗装ブースの中にクルマを入れ、日栄自動車の皆さん絶対に触れたりするのは厳禁。せっかくの塗装が台無しになってしまふ。塗料が硬化する速度というのは、気温や湿度など様々な条件に左右されるため、好きなときに出来るものではない。



塗装が終わった後、塗装ブース内で熱を加えて塗料を硬化させる。実際に塗装が完全に硬化するまではまだ時間がかかるのだが、撮影の都合もあるので大体硬化したところでブースから外に出すことになった。さて、どんな感じに塗り上がったかな? ちなみに、フェンダー類に関してはひと足先に完成していた。



塗装開始。本来この段階では塗装ブースの中には入れないのだが、今回は撮影のために短時間だけ中に入れていただいた。このブースの隣には、ほぼ同じくらいのボリュームがある巨大な換気装置が置かれていた。巨大な掃除機の上で作業をしているようなものなので、塗料の飛沫が飛んでくるということはない。



次に塗装しない部分を綺麗にマスキングする。スタッフの皆さん慣れていることが多いあって、細かな指示など受けることもなく、どんどん作業が進んで行く。どこまで塗るのはケースバイケースということだが、今回のようなケースの場合はインテリアトリムなどで隠れてしまう部分は塗装しない。



こうやって外に出してみると、ブース内にあるときとは違ったイメージに見えるから不思議なもの。塗る前はもう少し風変わりな色に仕上がるだろうと想像していたのだが、実際は思っていたほど変な感じ? にはならなかった。結局のところ、ビートルはどんな色に塗ったところでビートルだということなのだろう。

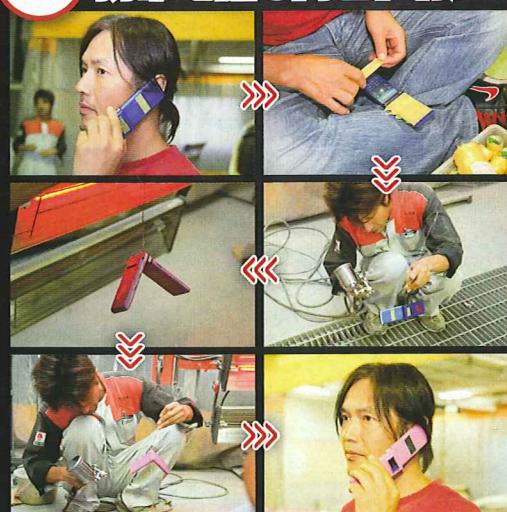


さすがにプロの職人さんは動きにためらいや無駄がない。しかし、同じペイントを使用しても、塗る職人さんによって微妙に色合が異なってくるとい。二人がかりで一台のクルマを塗る場合には、部分ではなく左側と右側といった感じで役割を決めている。確かに同時に両面を見ることはできない。



これでマスキングが完成。ビートルはフルトリムというわけではないので、インテリアに関しても鉄板が露出している部分は全て塗装する。前回、オレンジ色に塗ったときは本当に表面だけをサッと塗ってもらったので、この写真のようにドアの開閉面にはまだオリジナルのボディカラーだった水色が残っている。

## COLUMN 携帯電話も同色仕様に!



古Q編集長、大人しくしていると思ったら自分の携帯電話にマスキングテープを貼っていた。何をやっているかと思ったら、日栄自動車の職人さんにお願いして、FSBと同色にペイントしてもらうというのだ。最初は「それはちょっと…」といふ話だったにもかかわらず、壊れてもOKということで無理をお願いしてしまった。ホント、ワガママな編集長でゴメンナサイ。蝶番が使用されている部分があつたし、硬化のためにあまり熱を加えられない等の条件もあり、色々と面倒な作業になってしまった。完成後、実際にテストしてみたら…。ああ良かった、ちゃんと通話できるよ。でも良い子の皆さんは決して真似しちゃいけません。



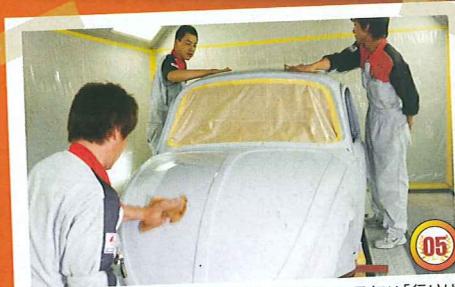
ここまで塗り上げてしまうと、かなり完成時のイメージが湧くようになってくるだろう。鈴木専務は、「クルマは余計なものが一切付いていない状態が一番美しく見える」そうで、そういう点ではスムージングで仕上げなくなる気持ちちは大変良く分かると仰っていた。いかにも職人らしい意見だな。



何をやっているのかな? 思ったら、屋根を塗装するときに使用する足場を作っていた。こういう物のセッティングに関しても、ちょうど良い高さや距離があるのだろう。今回は中村さんが一人で塗装の作業を行なうが、塗料の硬化の時間の関係で、大きなクルマなどでは二人で同時に塗ることもあるという。



一方その頃、Y's-CUPで破損してしまったケルシャーのフロントスポイラーの修理と塗装の作業も並行して行なわれていた。破損した部分が大きかったので、当初は「えっ、これ直すんですか? 考えさせてください」といわれてしまったものの、古Q編集長の希望もあって無理をお願いすることにしたのだ。



そしてさらに塗装前の最後の仕上げを行なう。最初は「行けば何か手伝えることがあるかも知れない」と思っていたものの、全ての作業に対して職人業が要求されることが分かったので、邪魔をしないでただ見ているだけにした。我々の服などに付着した微量の油分でも、塗装を台無しにするには十分だそうだ。